

## 第 19 回英連邦戦没捕虜追悼礼拝開催される

8月3日（土）保土ヶ谷の英連邦戦死者墓地において、第19回英連邦戦没捕虜追悼礼拝が行われました。戦後50年目の1995年、雨宮剛氏（青山学院大学名誉教授）・故永瀬隆氏（元陸軍通訳）・故斎藤和明氏（国際基督教大学名誉教授）の提唱により、日本人による初の追悼礼拝が行われ、それ以来毎年8月の第1土曜日に執り行われています。年々参加者も増え、今年は150名を超えました。大学生や高校生の参加者も多く、若い人達に少しずつこの集まりが広がっているようです。

墓地に埋葬されている連合軍の捕虜の多くは、泰緬鉄道の建設に酷使された後日本に連行され、疲弊した体での更なる強制労働で命を落としています。彼らが経験した泰緬での灼熱とそこでの労働を想像しながらの追悼礼拝ですが、今日は例年より多少気温が低く、時折風も吹いて凌ぎやすい天候の中で集会でした。

式は奥津隆雄氏（新宿ホライズンチャペル牧師）の司会のもと、関田寛雄氏（日本基督教団牧師）による追悼の辞と祈祷が行われ、続いて英連邦代表アンディー・エドニー海軍大佐（イギリス大使館付武官）、旧連合軍代表ヴィレム・フェルミューレ海軍大佐（オランダ王国大使館付武官）、主催者代表雨宮剛氏（青山学院大学名誉教授）による挨拶がありました。次に墓地中央の「犠牲の十字架」へ献花が行われ、関田牧師の祝祷によって礼拝を閉じました。



オーストラリア区での献花 オーストラリア大使館付武官と横浜商業高校生徒さん

その後参加者一同で納骨堂、オーストラリア区、カナダ・ニュージージーランド区、インド・パキスタン区へと移動しながら次々に献花をおこないました。献花の際には合唱団コール・ファーマーの皆さんが、讃美歌やウォルシングマチルダなど各国にふさわしい合唱を添え、その歌声は献花を一層印象深いものにしました。

最後に雨宮名誉教授と奥津牧師による参加者へのお礼の言葉があり、集会は終了しました。挨拶に立たれた方々のお話を簡単に紹介します

## 関田寛雄氏（日本キリスト教団牧師）



マーティン・ルーサー・キング牧師の言葉を想起したいと思います。「汝の敵を愛せよ」との主イエスの言葉に基づき、彼は次のように訴えています。「敵意をなくすために敵意を持ってしては、報復の悪循環に陥るばかりである。……だから黒人たちよ。白人の兄弟姉妹を愛そうではないか」と。キングの運動の目的は勝利でなく共に生きることなのでした。経済力を強化して「世界に勝つ日本を」と叫ぶ日本の首相の発想を、「世界と共に生きる日本を」へと変えて行き、アジア太平洋地域に平和を確立する為に、力を合わせて祈りつつ、励んで参りましょう。

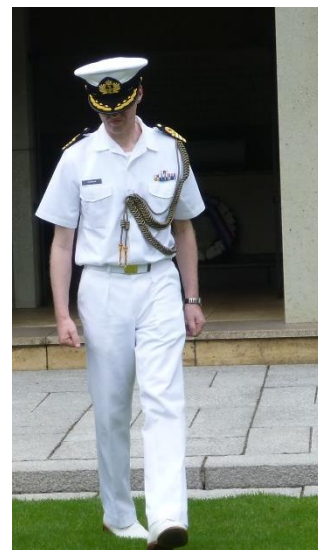
## エドニー海軍大佐（駐日イギリス大使館付武官）

歴史は現在と将来に対する先例です。どんなに不快に思えたとしても真実に向き合わなければなりません。和解（reconciliation）は人類のもっとも力強く、常に効果的な平和への道筋です。和解は敵を再び友人にします。和解は政府に平和を遂行させます。和解は他のどんな治療も不可能な治療を、文化的政治的傷口に対して行います。和解は憎しみを乗り越えさせます。和解は今日私たちと共にあります。



## フェルミューレ海軍大佐（駐日オランダ大使館付武官）

1942年2月27日はジャワ海沖の戦いが始まった日です。オランダ海軍駆逐艦コルテノールの乗組員の中に、若き伍長だった私の祖父がいました。戦闘配置についていた私の祖父は魚雷攻撃を受け、艦は二つに裂け、40人の乗組員と共に海に投げ出されました。丸一日後、祖父は日本船に救助され、戦争捕虜としてビルマに移送され鉄道で働きました。終戦から数カ月後の1946年、祖母は夫を心配してタイに探しに行き、祖父をようやく見つけました。他の多くの同時代の人と同様、祖父はその体験を語ることはありませんでした。この特別な経歴の為、私はこの追悼式に参列することが出来、大変光栄です。この穏やかな敷地内にある聖廟には21人のオランダ人捕虜のお骨が納められています。本日は彼らを偲ぶ日です。またその他各国の戦争捕虜にも追悼の意を表します。





### 雨宮剛氏（青山学院名誉教授）



私にとって人生を変える経験は 1951 年の夏に起こりました。高 2 の私は国際キリスト教ワークキャンプに参加し、そこでフィリピンの教会代表アモール・T・バンダ氏と出会いました。彼はバターン州マリベレス教会の牧師の息子、一家全員がかの悪名高い「死の行進」の体験者で、ご尊父と弟さんほか多くの肉親や親せきが日本軍に虐殺されたと述べました。そして「にもかかわらず自分が日本の教会に派遣されたのは、日本軍によるこの残虐行為を日本人に知らせるとともに、赦しと和解のメッセージを伝えるためだ」と語って泣き崩れたのです。それまでの私は自らを戦争の犠牲者としてしか見てこ

ななかったのですが、バンダ氏との出会いを通して、アジアの人々に対して日本人は加害者であったという重大な視点を教えられました。私はフィリピンのキリスト教会に宛てて「謝罪と赦しと和解」の手紙を英文で認め、同氏に託しました。彼が亡くなるまでには、バンダ家の皆さんと私とは完全に和解していたと信じます。和解とは、時間のかかる険しく遠い道程です。

### 奥津隆雄氏（新宿ホライズンチャペル牧師）

皆様本日はご参加下さりありがとうございます。毎年この会の準備をするのは正直言って大変です。10 月頃からすでに翌年の追悼礼拝の日程を決め、出席の依頼、スピーチの翻訳その他様々な仕事をこなしていかなければなりません。しかし私は考えます。戦争が起こったらもっと大変になるのだと。これからも平和を維持し、この慰霊祭を続けていかなければと思います。皆様もこれからもどうぞご参加ください。



雨宮剛氏（左）と奥津隆雄牧師



インド・パキスタン区で合唱するコール・ファーマーの皆さん

（小宮まゆみ）